

「ん……………？ ふあ……ふあああ……ん～？ もう夜じゃないの……結構寝てたわね……」

深夜。基地の格納庫。

そこに置かれた休憩用のボロいソファの上でパイロットスーツの美少女が目を覚ました。

彼女の名前はシャッテ・ジュードヴェステン。

長く綺麗なサラサラの金髪と、赤い目をした美少女パイロットであり天才的な頭脳を持つ。

そんな才色兼備の美少女であり、更にそのスタイルは非常に良く、寝起きで伸びをする彼女の大きすぎる、90は超えているおっぱいを”たゆんっ♡”と揺らしていた。

ただでさえ胸やお尻が大きく、男好きするエロい身体をしているシャッテだけれども、その彼女が着ているパイロットスーツが更にそのエロさを際立させていた。

それは白のレース下着とコルセットを合わせたようなもので、健康的な色を見せる少し褐色寄りの肌をエロく飾っていた。

大きすぎるおっぱいと尻の谷間まで見せる様なその姿は男を魅了するには十分以上のものだった。

「ねむ……………ん？ あれ？ タオルケット……………」

シャッテは可愛らしい顔に眠気の色を残して、目に浮かんだ涙を拭いながら周囲を見渡した。

場所は格納庫だと直ぐに思い至りつつ、眠ってしまったことと、自分の身体にタオルケットがかけられていたことについて思考を巡らせていく。

直ぐに答えを出した彼女は小さく微笑んで「おじさま、ね♡」と嬉しそうにしつつタオルケットをソファに置いた。

「ふあああ……良く寝たって言うか、寝すぎたわね」

身体を起こしたシャッテ。

彼女は機体の整備についてのアドバイスというか、その頭脳を活かしてパイロットだけではなく科学者としても活動していた。

その為に格納庫で整備士たちと会話をしていたのだが、数時間前に疲れて寝てしまっていたのだ。

数名の整備士と共に来ていたはずだが、日ごろの疲れからか爆睡するシャッテを起こすことも出来ずに皆、それぞれ帰っていったようだった。

起こせなかった理由としては、シャッテのその大きすぎる爆乳が寝息の度に揺れて♡ たわんで♡ 柔らかさと大きさを誇るようであり、普段は男ばかりの整備士たちでは目に毒過ぎて

声をかけることも起こそうと身体を揺らすことすら躊躇ってしまったのだった。

その結果残されたシャッテはまだ少し寝ぼけた気持ちで首を回し、艶のある金髪をかき上げた。

「ん……お……シャッテちゃん起きたのかい？」

そこに声かけられた。

誰もいないと思っていたシャッテは綺麗で可愛らしい顔に少しだけ驚きの色を載せると、声の方を振り返った。

「……おじさま❤️ ええ、起きたわ。こんな時間までグッスリなんて思いもしなかったけれどね」

そこにいたのは50歳ほどの日本人系の中年整備士。

特別腕が良い訳ではないけれど、悪い訳でもない、真面目に仕事をこなす男。

やや肥満がちなだらしない身体をしているけれど、不摂生というほどでもないようだった。

そんな彼の名前は『ジロウ』、シャッテは彼のことを『おじさま』と呼ぶ。

男女の仲ではないけれど、それなりに長い付き合いであり、どこか親子のような空気感が2人の中にはあった。

寝ているシャッテの身体にタオルケットをかけたのも彼であり、彼女もそれに気付いているのでウィンクして「ありがとう★」を伝えていた。

「日頃の疲れが溜まっていたんだろうねえ……コーヒー飲むかい？」

「ありがとう、いただくわ」

ジロウはシャッテのそのエロすぎるとも言えるパイロットスーツ、白の下着のように見えるそれに生唾を飲んで視線を逸らしつつ会話をしていく。

そのまま直視するのは彼の紳士的な部分では『いけないこと』と判断したらしく、目線を逸らすと近くに置かれたコーヒーマーカーに向かい、心を落ち着けているようだった。

どこか緊張しているような男の姿にシャッテは楽しそうに微笑むが何を言うわけでもないようだった。

彼女からしたらまさに父と娘ほどの歳の差がある訳だけれども、そんな自分よりも遥かに年上の男が胸の谷間や太ももに視線を走らせて赤面する姿を面白く感じているようだった。

シャッテは自分の魅力を十二分以上に理解しているが、身体をチラチラと見られると多少の恥じらいはあるようで、ジロウの視線を切る様に手でそっと胸元や太ももを隠していた。

自分の身体が男にとってどう見えるか、それは過去の経験から知ってはいるけれど、無暗に劣情を煽り、興奮させてしまっては自分の身にも危険があることを理解していた。

理解したい割には非常に扇情的な、セクシーな服装をしているが、それはあくまでファッションである、ということであった。

もちろん、自分の魅力を理解してくれる、というのは悪い気はそこまでもしないので、露骨に嫌そうな顔をするほどでもないようだ。

彼女が少しオドオドしながらコーヒーを淹れるジロウの丸まった背中を実に楽しそうに見つめていた。

「良し……はい、シャッテちゃんコーヒー」

「うん、ありがとっ❤️ ふふふ❤️」

マグカップに注がれたホットコーヒー。

それを受け取る際に両手を差し出せば、シャッテのおっぱいは腕の間で挟まれて、意識せずに谷間をアピールするように”むぎゅっ❤️”と寄せて見せつけてしまっていた。

圧巻のサイズ、90は余裕で超えているようなシャッテの爆乳を見せつけられるとジロウはただただ赤面するばかりであり、彼女と一人分ほどの距離を開けてソファに座りコーヒーを啜っていく。

その姿を見てシャッテは、谷間を見られていたことに気づいて恥じらい、頬を赤らめる。

少しだけ気不味い空気も流れるが、そこはそれなりの付き合いがあるのでコーヒーを飲みながら適当に雑談をしていけばそんな空気も流れていく。

ジロウも緊張と興奮はしつつも、いくらパイロットだからと言っても自分よりも遥かに年下の相手、しかも女の子相手にビクビクも出来ないという見栄もあり会話に応じていく。

「そう言えば……聞いたことなかったけど、おじさまって何歳？ 結婚はしているのよね？ そんな話聞いたことあるし……」

「ん、ああ……言っただけ？ 今年で51歳、だねえ、シャッテちゃんよりも大分大分年上でねえ。ああ、うん、結婚もしてるよお、子供いてねえ、シャッテちゃんと同じ歳の娘、だね」

穏やかに応えるジロウは「シャッテちゃんほど美人じゃないけど可愛いんだよ」と、最近仕事の関係で会えていない娘を思い出して小さく微笑んでいた。

「へえ、あたしと同年……ふうん、結構大きい娘がいるのね」

「もう私も50歳だからねえ……」

なるべくシャッテの方を見ないようにしながらジロウは世間話をしていく。
家族のことを聞かれ、ジロウはこの仕事柄もあり、中々会えない家族のことを思っていた。
コーヒーを啜り、シャッテと同年の娘を思い出す。

「……………（そう、シャッテちゃんと娘は同年、同年なんだよね）」

いくら美少女で、非常にエロい男好きする身体をしているからと言って自分の娘くらいの相手に興奮したり欲情してはならないとジロウは小さく首を振った。

彼は、以前ほんの噂——趣味の悪い噂としてシャッテが『整備士に手を出している』『男を逆ナンしている姿を見た』『片っ端から男を食い漁っている』という話を聞いていた。
むろん信じてはいないけれど、それでも男としての期待はしてしまっている。

「……………っ……！」

噂は噂という分別はついているし、シャッテには『アサヒ』という恋人がいるのも彼は知っていた。

知っていたけれど近距離でマジマジと見たシャッテのパイロットスーツ姿は非常にエロく、下品とさえ思えるほどであり、またそのスタイルはここしばらくオナニーすらしていない彼には刺激的過ぎた。

その興奮からゆっくりと前かがみになったジロウ。股間は既に勃起してしまっていて、それなりに『オス』として誇れる太めのチンポが硬くなっていた。

ジロウはそれを気取られないようにしていたのだが、シャッテはほんの少しの違和感——動きから看破していた。

「あ……………ね……もし、かして……勃起しちゃったの？ あたしの、これ？」

「あ……いや……その……………別にシャッテちゃんにとって訳じゃなくて、最近忙しくて、あ〜、

今日もさっきまで作業してて、あれだ……」

自分の娘ほどの相手に勃起を気づかれた恥ずかしさもあり、顔を赤くして言い訳をしていく。

シャッテは、照れつつ、自分のパイロットスーツを少し摘まんで見せた。

その服装が男を興奮させるものだという自覚はしっかりとあるようだった。

彼は勃起の理由を聞かれて、あくまでもシャッテの身体で興奮した訳ではなく、疲労からくる『疲れマラ』だと説明していた。

それは事実ではある。

整備士は忙しい仕事であり、今日だって深夜まで作業をしていたからこそ、子孫繁栄を第一とする生命としては疲労が強い時こそ生殖をして早く子を残せというサインを送っている。

しかし、それと同時にあまりにもエロいシャッテの身体に興奮した事実もある。

それを本人相手に言う訳にはいかないという感情から隠すのだが、シャッテとしてはそこは大して気にしてはいなかった。

自分の身体を見て勃起しない男なんてインポかゲイくらいのもんだろうし、なんて自信。

それと合わせてこんな夜まで仕事をしてくれていたジロウに対する強い感謝の気持ち。

「……………ん、その、もし、良かったら、あたしがスッキリさせようか？ その、手とか口、だけど……どう？」

「え、いや、シャッテちゃんっ……！ それは、流石につ……！」

「流石にこのまま戻るの嫌でしょ？ 戻ってオナニーするくらいなら……ね？」

いきなりの申し出に遠慮というかその前に驚くジロウ。

噂で聞いていたことが現実になったという感覚に合わせての、美少女からエロい誘いを受けるありえなさを彼は理解していた。

その噂も『若い整備士がああ美人パイロットと』だったり『臨時で来たイケメン整備士が美少女艦長と』なんて話は彼も聞いたことがあった。

しかし、ジロウは自分のことをイケメンとは思えず、モテる要素などないことを理解していた。

極端なブサイクではなく、妻子がいる身なのでそれなりな恋愛もしてきたが、今の彼は51歳で中年太りした男でしかないのも確かだった。

それなのにシャッテのように美少女で頭も良くてスタイルも最高峰の相手に求められることが信じられないでいた。

シャッテはシャッテで、つい申し出てしまったけれど、緊張と不安もあった。

過去に、色々な経験をしてきた彼女だけれども恋人であるアサヒが出来て以来、その辺りは全て清算していたからだ。

「大丈夫だから♥ 変に考えないで？ ただの感謝の気持ちだと思って？ ね？ あたしたちの為にこんな夜まで頑張ってくれてるんだし、そんなえらあい人が一人シコシコなんて悲しいでしょ？」

不安そうなジロウに対してシャッテは大きな胸を”たゆん♥”と揺らしながら可愛らしくウィンクをする。

ウィンクは可愛らしいけれど、その片手はまるでチンポでも扱くように上下にシェイクさせていて下品なジェスチャーをしていた。

「……………っ…………」

そんな可愛らしくもエロい姿。

手を上下させる度に柔らかそうなおっぱいは”たゆたゆ♥”揺れていて、それにジロウは生唾を飲んだ。

もしこれが何かの罠でもなんでも良いやと思うほど興奮して、少し恥じらいながらも彼は迷って「お願い、します」と律儀に頭を下げていた。

その姿をシャッテは「や〜ん♥ 可愛い♥」などと機嫌良く微笑むと、舌なめずりをしながらジロウに身体を寄せていく。

それは久しぶりの『恋人以外の男』に対する緊張と期待。

過去の経験を思い出してしまっているシャッテは内心で恋人に「これはあくまでもおじさまに対する感謝に気持ちだから！」と言い訳をしていく。

アサヒに対する謝罪も内心で処理していき、生唾をコクリと飲んだ。

「すごく気持ち良くしてあげるからね？ 今日までの疲れぜえんぶオチンポから出しちゃって……♥ ん……口開けて？ れろお……♥」

「うっ……あ……んんっ……♥ ちゅう……っ♥」

ずっと身体を寄せたシャッテは妖艶に——どこか艶っぽく目を細めると健康的な色合いの頬を赤らめながらジロウの頭を抱き込むようにしてキスをしていく。

ぽってりとした色気のある厚みの唇で、ジロウの少し汚れ荒れた唇へのキス。
それはラブシーンのように濃厚であり、シャッテは唾液の濡れた舌でジロウの唇を舐めると、その舌を彼の口の中に挿入していく。

「んう……れろっお……ちゅっ……❤️ んんっう❤️ れるる……❤️」

片手はそっとジロウの股間へと伸びていき、ズボン越しにチンポを撫でまわしていく。
優しい手つきでチンポを撫でながらシャッテはファスナーを下ろしていき、その間も舌をジロウの口の中へと入れて歯を一本一本舐めて綺麗にするようなねちっこいキスをしていた❤️

「はあ……❤️ ちゅう……れろお❤️ んれるる……❤️ れろお……ん❤️ おっき、い……❤️ かも……❤️」

キスに合わせてのチンポへの刺激。
繊細な指先で下ろされたファスナー、そして窮屈そうに震えるチンポを下に控えさせるように下着が押し上げられていた。
そのジロウのチンポをシャッテは指先でまずは優しく撫でるように刺激していく。
下着越しの優しい刺激で感じさせつつ、そのチンポのサイズに思いをはせていくようだった。

「れるる❤️ んちゅっ❤️ れろお……ちゅぽっ❤️ (アサヒよりは短いけど、太さはおじさまの勝ち、かも……❤️ でも、熱さはかなり……❤️)」

下着越しのチンポサイズに興奮しながらシャッテは指を這わせていく。
ツンツンと龟头辺りを突いて刺激し、優しく指で挟みこんで、カウパーが漏れてくるとそれを指先で突いていく。

「あっ……！ はああ……れろおっ……！（シャッテちゃんっあ、手も、口も全部柔らかくてっ……！）」

「れろお❤️ ん❤️ ちゅうう❤️ れるれる❤️ んっう……❤️」

キスだけでもジロウを蕩けさせるテクニックと、何よりも『イイ女』と唇を重ねている実感。
今までも遠くからシャッテの大きな胸の揺れ、安産型のデカケツを見ていたジロウ。
魅力的で魅惑的な金髪が揺れる様に興奮してきた訳であり、かつ才能も素晴らしい彼女。

そんな彼女——歳は離れているし恋愛関係ではないけれど『憧れの女の子』と言えるシャッテとのキスに蕩けていくジロウ。

既にチンポはやる気十分なほどに勃起していてカウパーを垂らしていた。

「んちゅっ……はぁ……ふはぁ……❤️」

片手はチンポを弄りながらシャッテは唾液の糸を引かせて、ジロウの口から舌を抜き出して唇を離した。

溢れたカウパーが染みになってしまっている下着を見て——。

「キスと手だけじゃ……物足りないでしょ❤️ ほら、立って❤️ 立って❤️ S t a n d U p❤️」

——キスの味を、ジロウの唾液の味を思い出す様に舌なめずりをすると相手を立ち上がらせた。

ジロウが興奮から少しふら付きつつも立ち上がると、シャッテはソファに座ったままズボンのベルトを外していく。

興奮しているのはシャッテも同じくであり、どんどんノリノリになっていくようだった。

「ふふふ❤️ クリスマスプレゼントを開けるときみたいな気持ち❤️」

どこか無邪気に子供っぽく微笑むと、シャッテはズボンを下ろし、その下着にも手をかけた。

カウパーの染みが出来ていて、大きく膨らんだそこ、その下で待ち構えているチンポに期待と興奮をしながら——。

「御対面★」

”ずるっ”

——それらを一気にずり下げた。

下着に一瞬引っかかる様にしたけれど、チンポは無事にシャッテの前にお披露目となった。

長さはそれなりだけれど、太さがあるのでズングリとした印象を与えるチンポ。

包茎の皮は余っているようで、亀頭が覆い隠されている。

それに対してシャッテは軽蔑する事なく「可愛い❤️」と微笑んでいた。

そんなチンポが露出すると途端に強くなるオスの匂い、さっきまでも感じてはいたようだけど、下着越しのものとはけた違いの濃ゆい匂いにシャッテは鼻をスンスン鳴らしていく。

「っ♡ すんすんっ♡ すっごい臭い♡ って、当然、よね♡ さっきまでお仕事してたんだもの♡ すんすんっ♡ それにしても、汗……♡ カウパーにオシッコっ♡ どの臭いもきつついけど♡ ふふ♡ 紳士ね？ 不潔にはしてないみたい……♡」

「う……そんなに嗅がれるとっ……あ……！」

形の良い鼻を押し当てるようにしてチンポの臭いを嗅いで楽しむシャッテ。

鼻に突き刺さるチンポの匂いは、決して良い香りのハズもないのだが、シャッテはジロウの汗やその他諸々の混ざった臭いを楽しんでいた。

ただ単に『汗臭い』などと断じてしまうだけではなくて、そのオスとしての魅力を図る様に鼻をヒク付かせるシャッテ。

「ん♡ すんすん……♡ こんなに臭いとっ……♡ すう……はあ……♡ たまらなくなってしまうわ……♡」

目を潤ませながら臭いを楽しんだシャッテはチンポの先端から垂れてくるカウパーを掬い取るように舌を差し出して――。

「ん……れろお♡ ん……♡」

――下から優しく舐めとっていった。

「おっおおっ……！」

ただ舐めただけ――じっくりとじんわりと下から舐め上げただけの刺激だけれどもジロウはその舌の柔らかさ、熱さに声を漏らしていた。

妻子持ちではあるけれど、子供が産まれて以来妻とは『ご無沙汰』であり、風俗に行くようなこともなかった彼は数十年間、性行為をしてきていなかった。

夫婦仲は悪くないけれど、仕事柄転勤出張が多く飛び回っている為にあまりそんな時間が取れないままに歳をとってしまった結果だった。

そんなジロウのチンポを嬉しそうにシャッテは舐めていく。

彼女もまた恋愛感情ではないけれど、かなり付き合いの長い整備士であるジロウに対しての感謝の気持ちは強い。

「れる♡ ん♡ れろお♡ ふふ……おじさま、お汁垂らし過ぎ♡ ちゅっ♡ れろれろお♡ んんう♡ ちゅっ♡」

「はっ……！ あ、シャッテちゃん、上手すぎっ……！」

チンポの根元を優しく掴んだまま、舌をゆっくりと、やや大きめのストロークで動かしている。

「んん……皮、剥くわよ？ 痛かったら行ってね？ んん……っ♡」

気持ち良くする為には包茎が邪魔だと判断してシャッテは舌を皮の中に挿入していく。
とがらせた舌で亀頭を――。

「れろお……れるれる♡」

――舐めていき、そのままゆっくりと舌と唇で包茎の皮を剥いていく。
その慣れたテクニックにジロウはたじたじであり、何よりも気持ち良くて呻くことしかできないでいた。

「ん……♡ ふふふ♡ しっかりとオスの臭いがするわね……♡ あたし好み♡ ちゅっ♡」

皮を剥いたことで溢れてきたチンポの濃い臭いにシャッテは目を細め、鼻を鳴らしていく。
そして皮を剥いて蒸れたチンポを下から上に、アイスクャンデーでも舐めるようにゆっくりと舐めていき、亀頭、カリ首も丁寧、というかねちっこく舐めていた。
舐めながらもジロウからしたら、シャッテを見下ろす形になるので、その大きすぎる谷間、”むにゅっ♡ むにゅ♡”と見せつけてくるようなそこを見ていると興奮に鼻息は荒くなっていた。

その興奮に加えての久しぶりの快感に情けなくも腰を揺らしていくのを見てシャッテは――。

「もう射精しそうなの？ まだまだ日頃の感謝は足りないからね～？ ふふっ……こっちも興味あるでしょ？ ちゅっ♡」

——ビクビクと震えるチンポの先端を可愛がるように人差し指の腹で撫でると、着ていた下着のようなパイロットスーツの胸元をはだけていく。

元々下着と見間違ふ様なエロいものであり、脱ぐのは簡単なようだった。

楽しそうに微笑みながらブラをズラすと——。

”たゆんっ♡”

「知ってると思うけど……大きいでしょ♡ ふふふっ♡」

——ブラで支えられていた巨大なおっぱいが溢れ出す。

フルフルと小刻みに揺れる大きすぎるおっぱいを見せつけていき、それを下から手を入れてシャッテは持ち上げるようにして震えさせる。

まるで巨大な葛餅のように”プルプル♡”揺れるその姿にジロウが生唾を飲み、これからされるだろうことに興奮していた。

彼だって真っ当な男であり、おっぱいを見せつけてくるシャッテのその姿が何を意味するかくらいわかっていた。

「はぁ……はぁ……」

「そんなに鼻息荒くして……♡ おじさま、可愛い……♡ その可愛さに敬意を表してあなたのおっぱいで思いっきり搾り取ってあげるからね？ 泣いても知らないわよ～♡」

興奮するジロウ。

その興奮を喜びながらシャッテは口の中に唾液を溜めると、それをおっぱいにローションのように垂らしていく。

大きくて深い谷間に唾液のローションを染みわたらせたら、そのおっぱいを両手で持ち上げるようにして——。

「天国見せてあげる……♡ それっ♡」

”むっにゅうんっ♡ ぽにゅんっ♡”

——興奮に震えるジロウのチンポを挟み込んでいった。

中々に立派なサイズであるそのチンポは、シャッテの大きなおっぱいの谷間から僅かに顔をのぞかせていた。

大きくて♥ 柔らかくて♥ ぷるっぷるなデカパイでジロウのチンポに密着させるように包み込む。

「っ！！ シャッテっ♥ ちゃ、ああっ！ すごっ……いっ……こ、れっ♥」

「あたしのパイズリ♥ かなり評判なんだからね？ ほら、挟むだけじゃなくて……♥ こうやってしっかりっ♥ パイズリ、したげるっ……♥」

きめ細かく手触りの良いシャッテの肌。そんな肌の持ち主の超爆乳によるパイズリの快感にただの中年おっさんでしかないジロウが耐えられるはずもなく悲鳴のような声もあげていた。

それほどまでに感じてくれている姿を見てシャッテは嬉しそうに笑いながらおっぱいをゆっくり、ねっとりと動かしていく。

「ふふふっ♥ パイズリでたあっぷり射精してね♥ じんわりっ、じっくりザーメン搾り取ってあげるからね♥ 明日は一滴も出ないくらいに♥」

シャッテはおっぱいを両手で挟みながら、身体ごと動かしてチンポを刺激する。

柔らかくて大きなおっぱい♥ 吸い付く様な快感を与えられてジロウはチンポをビクビクさせてカウパーを漏らしていく。

「はあ……はああっ！ はあっ……射精っ、このままっ……あっ！」

「出しちゃえ出しちゃえっ♥ 遠慮なんていらないからね～？ キンタマの中身からっぽにするつもりでGOGO♥」

気持ち良さにチンポを震えさせるジロウにシャッテもまた興奮して息、”むにゅっ♥ むちゅ♥”っとエロい音を響かせてのパイズリに熱が入っていくようだった。

その快感を受けて、しばらくオナニーもしていなくて十数年女性と肌を重ねることもなかったジロウが長く耐えられるはずもなく——。

「あっ！ あああっ！ 出るっ……射精っ！ あ！」

”びゅるるっ……！ びゅるるる！ びゅっ！”

——かなり濃ゆく、溜まっていたザーメンを射精していく。

シャッテの爆乳に挟まれたままビクビクと震えては精液を吐き出し、彼女の綺麗な顔にまで飛び散らせていく。

もちろん、そのおっぱい、谷間にもザーメン溜まりを作るほどの大量射精♥

「んっあ……すっご・っ♥ れろお……ちゅ……♥ アサヒのザーメンより濃いかも♥ おいしっ♥」

顔、口元に付着した精液を舐めとってシャッテはその濃さに驚いているようだった。

今日ここに来る前も身体を重ねた、恋人のアサヒよりも濃い精液。

溜まってたとは言え、若さと精力でかなり濃い精液を射精しているアサヒよりも濃いジロウのザーメン。

その濃いザーメンに、ただ感謝の気持ちでスッキリさせるだけのつもりだったシャッテは、少しだけ身体の熱が高まってしまっているようで頬を赤らめながら、指で谷間に溜まった精液を舐めた。

「っ……これだけ出せばスッキリしたわよね？ 少しびっくりしちゃった♥ おじさま、あなたって……凄いのね♥」

精液の濃さに興奮している自分を隠す様に務めて明るく話しながら、シャッテはこれ以上精液を舐めるのは良くないと判断して、ソファ近くに置かれた棚からタオルを探そうとして、胸も大きいがこれまた大きなお尻を突き出す様にして下の段の引き出しを探っていた。

シャッテはジロウの聞いた噂通り、いや、それ以上に男漁りを繰り返していた時期もあるけれど、今は恋人であるアサヒがいるのでそれは控えていた。

しかし、久しぶりに味わった恋人以外の精液で、しかもそれがアサヒよりも濃いこともあって身体が興奮しだしていた。

このままではまずいとして、行為を終わらせようとしているのだが、そのジロウは射精直後の余韻から我に返ると、タオルを探すために突き出された大きなお尻に目が釘付けになってしまっていた。

「……………っ……！」

「う～ん……これは少し汚いし……これ、かしらね……」

シャッテは特に意図はしていない。

いないけれど、下着同然のパイロットスーツはお尻に食い込んでいて、大きく安産型の桃尻をフリフリ揺らして見せつけていた。

突き出された大きなお尻、そこに食い込み下着のようなパイロットスーツから、シャッテのアナルが微かに見えてしまっていた。

見る人が見れば、使い込まれているのがわかるような形状をしているが、ジロウにそこまでの余裕はなく、ただただ見えてしまった美少女のアナルに生唾を飲む。

そんなものを年単位でセックスレスだった中年男に見せつければ――。

「ま、これで良いでしょ、おじさま、あなたもタオルっ……って、あ……っ♥」

「シャッテ、ちゃんっ……」

――シャッテがタオルを見つけて振り返った時には、射精したばかりのチンポは大きく勃起していた。

先ほど射精したことも感じさせないくらいに勃起させて、反り返ったチンポを見せつける。

そのサイズ、雄々しさにシャッテはタオルを持ったまま固まってしまう、ジッとそこを見つめていく。

ジロウはジロウで改めて精液で濡れたシャッテ、露出した大きなおっぱいに生唾を飲み、このままでは終われないとアピールするようにチンポをビクビク震わせてカウパーを垂らした。

「おじさ、ま……………っ♥ ふ～～～～……………♥」

そのチンポを見てシャッテは少しだけ考えるようにに目を閉じながら、拭きとろうとした精液を指で再び舐めて口に運んだ。

その精液の味に彼女が興奮していき――。

「ね……おじさま……♥ まだ収まらないなら……エッチ、する？ お尻の穴で、だけど♥」

――悪戯っ子な小悪魔な笑みを浮かべてパイロットスーツの下、食い込む下着のようなそ

れを脱ぐとクルッと背中を向けて、尻に谷間を広げるようにして両手でデカケツ♥ アピールをして見せた。

アナルを見せつけつつ「あ、おまんこはダメよ？ あたしにはアサヒがいるんだから、アナルならギリギリ浮気にはならないし」とウィンクをしていた。

その姿にジロウは当然興奮していき、チンポを震わせるも――。

「あ……シャッテちゃん、その、コンドームとか、あ〜、ローション、ないと……」

――アナルを犯すのであれば準備が必要なのでは？と指摘していた。

彼自身、妻とはノーマルな行為ばかりでアナルの経験などはないけれど知識として知っていた。

それを伝えるのだが、シャッテは足を広げて、ややがに股になり”むにい♥”と更に尻の谷間を広げてアナルを見せつけていく。

「そうね……ゴムもローションもないし……さっきまで寝ていて洗ってもいないの……………♥ それでも、いい？」

「……………っ！！」

ゴムもない、ローションもない、温水浣腸での洗浄すらしていない。

およそアナルセックスをする準備が何も整っていない状態だけれどもジロウはその誘惑に勝てるはずもなく頷いていた。

頷いているジロウは、シャッテのアナルの下、おまんこから白い何かが垂れていることに気が付いた。

「シャッテちゃん？ おまんこから何か……垂れてるよ？」

「は……？ え？ ん……………あ……うわ、今朝出る前にアサヒとエッチしたときの精液……………ん、ぺろっ♥」

指摘されて気が付いた様子のシャッテは垂れてくる精液を指で拭うとそれを舐めていた。

その精液は恋人のアサヒ、しばらく会えなくなることもあり朝にもセックスをした名残であった。

舐めることで「やっぱりおじさまの方が濃いよね……」と呟いて、それが改めて彼女の興奮

に火をつけたようだった。

「気にしないで？ それより始めましょう？ もう遅い時間だし、さっさとスッキリしないと明日に響くもの♥」

「っ、わ、わかったよ……」

精液が逆流してくることくらい何でもないと言うように微笑んだシャッテはお尻を改めて突き出していく。

それに興奮しながらジロウは生唾を飲んでいき、パイズリで射精したばかりなのにガチガチに勃起したチンポをアナルへと押しつけていく。

「っ……入る、かな、これっ……」

「あ……♥ ん、お尻の穴、久しぶりだから優しく、して？ っ♥」

「わかつ、た……っ、っ！」

シャッテの「久しぶり」という言葉にアナルセックスが初めてではないことを確信してジロウはまた興奮していく。

いきなりアナルセックスを提案する時点で、未経験とは思ってはいなかったけれど、シャッテの言葉でそれを裏付けられると興奮は高まっていくようだった。

「これ……っ、なかなか……！」

興奮はしていくジロウだが、アナルへの挿入と言う未知の経験から手間取っていた。

シャッテの方もアナルの経験はあっても久しぶりであり、かつ解してもいないのでそう簡単にはいかないようだった。

「もう少し、強くっ……押し込むみたいにしないと、多分、入らない、わっ……」

「強くっても、っ……！」

本当にここに挿入出来るのかと言うほどの硬さにジロウは一瞬冷静になり、アナルが排泄の

ため——出すための穴で入れる為の穴じゃないことを思い出していた

そんな悪戦苦闘をしつつも、シャッテからのアドバイスを受けつつガチガチに硬く勃起したチンポを窄まった穴にグッと押しつけていき、無理矢理ではなく解す様に唾液と精液、カウパーで濡れたチンポを動かしていき——。

”ずっぶうっ❤️”

「あ……っ！」

「おほっおっ❤️」

——あるタイミングでチンポが挿入された。

使い込んではあるようだけれど、久しぶりの事もあり硬さの残るシャッテのアナルにジロウはチンポを半分くらい挿入していた。

滑るように入り込んだチンポはアナルの締め付けに興奮してカウパーを漏らしていた。

いきなりで、かつ久しぶりのアナルに少し情けない、下品な声をあげたシャッテだったが、片手をソファについて、片手で口を押えて我慢しようとしていた。

そんな恥じらいを見せる彼女の腰——大きくて形の良いデカケツ❤️からのラインの括れたそこを掴んで、力を込めて深く、根元までチンポを挿入していった。

「ほぐうっ❤️ おっ……❤❤ (おじさまのおちんちんっ、太いからっ……アナル広がっちゃうっ❤️)」

アナルを拡張される快感に足をプルプルさせていき、下半身に力が入った結果、おまんこから更に精液が垂れていく。

そんなシャッテの情けない声を聞きながらジロウは、いきなり根元まで挿入してしまったことを心配して「私のチンポ……どう？」と声をかけた。

彼としてはあくまでも「このままアナルセックスを続けて大丈夫か？」という意味合いだったのだけれども、久しぶりのアナルの挿入に少し興奮気味なシャッテは——。

「はっ❤️ はあ、そう、ねっ❤️ 長さはアサヒの勝ち、だけどっ❤️ お、太さはおじさまの勝ち、ねっ……❤ 凄く、立派よ？ 少し右曲がりなのもっ、あ、あたしの好み、かもっ……」

——と、チンポの感想を聞かれていると思い、脚を震わせながら素直な品評をしていた。
その発言にジロウは気まずそうに「い、痛くないかどうか……聞きたかったんだけど」と告げると、シャッテはハッとして顔を真っ赤にしていく。
バックで顔は見られていない状況だけど、耳まで赤くした彼女は無言で、片手の親指と人差し指で輪っかを作って「OK」を伝えていた。
気まずい空気が流れたけれど、それをどうにかしようとしたのは年長者であるジロウだった。

「っ……！ アナルで、セックスなんて、初めて、だよっ……！」

”ぬるっ♡ ずぷうっ♡ ぬるうっ♡”

「ふふっ……♡ あ、ん……♡ アナル童貞、だったのね？ んっ♡ あたしのアナル、そんなに弱くないから、もっと強くしても大丈夫、よ……♡」

ゆっくりとだけ腰を振っていき、チンポに粘液や、何か柔らかいものが纏わりつく感覚を楽しんでいき初めてのアナルセックスに感動していることを伝えていく。

感動に身体を震わせながら健気に腰を振るジロウの姿に優しく微笑むと、久しぶりながらも経験済み故の余裕を見せていくシャッテ。

その言葉に頷いてジロウはゆっくりとだが、腰の振りを強めていく。

「セックス、自体久しぶりで、ねっ……っ♡ 妻とはっ、子供を作ってそれっきりだったから、いきなり、シャッテちゃんみたいな美少女のアナルを犯すなんて現実味がなくて、ねっ……っあっ♡」

十数年ぶりのセックスがアナルセックスというかなりマニアックでハードなことを伝えながら腰を振っていく。

その動き、チンポから与えられる快感に声を漏らしながら、シャッテは耳まで真っ赤になっていたのを持ち直しながら、ジロウの言葉に反応していく。

「はっあ♡ おっ……うおっ♡ はあっ♡ あ、随分、してない、のねっ♡ あたし、なんて、アナルは久しぶり、だけどっ……♡ エッチは今朝っアサヒとしてきたわっ……♡ おまんこから垂れてる精液は、っ♡ そのときの、もののっ♡ ほっあおっ♡」

「今朝？ っは、はあ、はああ……シャッテちゃんみたいな彼女がいたら、そりゃ、毎日だっ

てしたい、もんだよねえっ……っ！」

お互いのセックス遍歴というか、下も話題をしながらアナルを解していく。

ジロウは改めてシャッテのその美貌や魅力を考えて「自分が若くて、こんな彼女がいたらそれこそ四六時中セックスをしていただろう」と頷いていく。

ゆっくりと広がっていき、カウパーと腸液のヌルヌル間でストロークを早くしていくジロウ。

「アナルは、久しぶりって言ってたけど、おっ……はあ、はあ……っ♥ アサヒくん、とはしてないの、かい？ っ♥」

「んんんっ♥ あ♥ はあ……おおっ♥ ……っ♥ そ、そう、ね、してない、わっ……おほっ♥」

シャッテはジロウのチンポの太さを感じながら、自分のアナルが彼のサイズに拡張されていく気持ち良さに感じてしまっていた。

2人とも、本番前の準備段階のつもりではあるけれど、ジロウはシャッテの話を聞くたびにどんどん興奮していった。

それなりに長い付き合いをしてきたけれど、こんな風に性関連の話なんて初めてであり、聞けば聞くほどシャッテの魅力を知っていくようであり、ジロウは腰をしっかりと掴みなおした。

さっきまでよりも強めに腰を振り、情けなく”ぶぴ♥”と空気が漏れる音をさせていき、ジロウは更に――。

「あ……サヒ、アサヒ、くんとしてない、なら、アナル……は？ シャッテちゃん、その、アサヒくんの前にも付き合ったりしてての、かなあ……？」

――彼女のことを知ろうと質問をしていく。

腰の動きも段々と早くなり、シャッテは足をガクガク震わせて、マン汁とアサヒのザーメンを床に垂らしていく。

「っ♥ うっあ♥ そう、ねっ♥ 恋人はアサヒ、だけよ？ 意外？ アナルは、アサヒとは違う男に捧げた、わっ……♥ おまんこ、もっ他の男♥ アサヒはあたしのおまんこ、しか知らない男、なの……っ♥」

「っ！」

シャッテから聞かされた話。

それは彼女の過去の話であり、噂で聞いたようにかなり経験豊富だという内容。

そこに加えての、現在の恋人であるアサヒにはアナルを使わせていないという事実。

そんな恋人も使っていないアナルに挿入出来ていることにジロウは興奮してチンポを震わせてカウパーを漏らしていく。

「おほっおっ♥ 熱いの、漏れてっ♥ 結構っ♥ 色々な男とエッチしてきたから、その中で、おまんこもアナルも教えられちゃってっ♥ んんっ、アサヒには、内緒、だからね♥ ほおっ♥」

深くチンポが挿入された瞬間に、品のない声を漏らしてシャッテは髪を振り乱していく。

身体中に汗をかいていて、ソファに手を突きながら足をガクガク震わせて久しぶりのアナルを楽しんでいるようだった。

その姿と、「アサヒはあたしのおまんこしか知らない」という言葉にジロウの独占欲——オスが脈打ちだした。

妻子がいる身であり、シャッテに心から繋がった恋人がいるのは認識した上で、彼女が欲しいと思ってしまったのだ。

大分スピードのあがっていたピストンを一度止めて、奥までチンポを挿入したら、物足りなさそうに腰をくねらせるシャッテに対してジロウは——。

「はあ……はあ……アナル、だと浮気にならないん、だっけ……」

「あっ♥ ん……え？ そう、ね……ならないわ……っ♥」

——確認を取る。

オスの本能を爆発させていき、不貞に対する罪悪感を「アナルは浮気じゃない」という理論で納得させると、挿入したチンポで奥をかき回す様に腰を揺らす、

シャッテのアナルに自分のチンポを教え込ませるような動きをしてみせた。

「この、シャッテちゃんのアナル……アサヒくんが使ってないなら、私のものにっ……私専用、したいんだよ、ねっ……」

「あ……っ♥ んんっ……そん、な……おじさま、専用っ？」

何とかまだ紳士的に興奮と本能を押さえつけてジロウは、シャッテのアナルを自分のものに——自分専用にさせてくれと頼みこんでいった。

その言葉を受けてシャッテは少し考えていく。

アナルは浮気にならないと言ったけれど、アサヒに対しての裏切りにならないか、という倫理観に対して自問自答をしていた。

しかし、そんな小さなことよりも、自分のアナルを押し広げてるジロウのチンポへの興奮が上回ってしまっていた彼女は——。

「……………あ、アナル、だけよ？ おまんこはアサヒのものなんだから？」

——照れながらもジロウの申し出を受け入れた。

自分のアナルを、恋人がいるのに他人のものにするという宣言。

その言葉にジロウは大きく喜び、チンポを震わせてアナルの奥でカウパーを漏らしていく。

「っ♡ あっ♡ もう、喜び過ぎ、なんだから……っ♡」

カウパーの熱さ、アナルの震えを感じたシャッテは吐息を漏らす。

色っぽい息を吐いたら、肩ごしに振り返って、アナルをキュッと締め付けながら——。

「あたしの身体も、心もアサヒのもの、だけどっ♡ アナルはっ♡ ん♡ お尻の穴だけはっ♡ おじさま——ジロー専用にしてあげるっ♡ あたしはのアナルは今日から、排泄と……♡ ジローと交尾する為の穴よ♡」

——スケベな宣言をして男を喜ばせていく。

恋心ではないけれど、オスとしての独占欲が強く溢れ出したジロウは、シャッテの言葉にチンポを更に硬くしていた。

シャッテも興奮からか、そのチンポを受け入れるという覚悟からか、呼び名を『ジロー』と変えて行った。

さっき射精したばかりというのも忘れるようにして20年近くしてきていなかったセックスに熱をあげる。

「っ……シャッテちゃんの穴が……私のっ……このアナルがっがっ……！」

「うんっ♡ あたしのアナルはっ♡ ジローの、ものっ♡ んんっ♡ 思いっきりほじってっ♡ はぁ♡ 情けない声出させてっ♡ 死ぬほど恥ずかしい喘ぎ声、出させてっ♡ アサヒに聞かせられないような声出させてっ♡」

シャッテの言葉に一気に興奮のボルテージを上げたジローはしっかりと腰を掴んでロックすると激しく腰を振りだした。

中年太りした腹を揺らして、音を立てるようにして腰を振る。

アナルの奥までチンポを挿入して、太りそれで押し広げていく。

自分の『モノ』になったシャッテのアナルに、しっかりとマーキングするように腰を振り、大きなお尻に腰を打ち付ける。

「はぁっ……はぁ！ 私の、私専用、っだからねえっ♡ アサヒくんには、絶対、絶対使わせたらダメだよっ……！ このっ♡ アナルっ……！」

「はっ♡ あぁあ♡ おおっあぁ♡ うほおおっ♡ わかってる、わっ♡ アナルはジローの、ジローだけのモノっ♡ あたしのお尻の穴はっ♡ ジローのものっ♡ だから♡ あなたのチンポじゃなきゃダメに、してっ♡ ひぐうう♡」

ほんの性処理、日々の感謝の行為のつもりだったシャッテだけれども、今はもう本気になってしまっていた。

久しぶりのアナルということもあるし、相性もあるし、何よりも強く求められることに興奮していた。

ジローに、オスに強く求められることにメスであるシャッテは興奮していた。

「はぁあ♡ おほっおお♡ あにやるっ♡ うほっおお♡ 奥、っ♡ くひいいっ♡ はぁあ♡ 孕ませてっ♡♡ ザーメン、たっぷりだしてアナル妊娠、させてっ♡ あなたのものって印付けてっ♡」

強く自分を求めてくるジローに興奮して、アナルで孕ませてなどと無理なことまでおねだりしていた。

ジローが腰を振るたびに、シャッテの身体が揺れて、その大きなおっぱいもたっぷたぶ揺れていく。

ソファに手を突きながらのバックスタイルでのアナルセックス。彼女を支える手も足もブルブル震えて快感に下品な声をあげていく。

「はぁあっ！ はぁ！ 孕ませる、からねえっ……！ この、ヌルヌルのっ……ケツマンコっ……
！」

「ひいいいっ♡ お尻の穴っ♡ おほおおお♡ おゝ♡ 広がってっ♡ うほおおお♡ おほっ♡」

シャッテが声をあげれば上げるほどのジロウの腰振りも強く激しくなっていく。

太いチンポが激しくアナルを出入りしてほじくっていき、未洗浄故にシャッテの排泄物が漏れ出してしまっていた。

茶色い汚れ、粘りつく様な排泄物をチンポに絡みつかせていき、腰を振るたびにカウパーと腸液に混じったそれがポタポタ床に垂れていく。

本来なら汚物であり、自分の肌に他人の排泄物がつくことは避けたいことだろうが、今ジロウの頭にはそんな考えはなく、むしろ粘り気のある暖かいものがチンポに付着することで快感さえ得ていた。

「ひああ♡ おおおお♡ ジローっ♡ ひゅごっ♡ 激し、いっ♡ おほっおおおゝ♡」

シャッテもアナルを犯されて、自分のモノにしようとするジロウの雄々しさにやられてしまい快感を貪っていく。

ガクガクと足を震わせて、今にも崩れ落ちそうになりながら、ソファに突く手も限界を迎えてもうそこに突っ伏す様にして喘いでいた。

2人の絶頂は近い位置にあり、互いに声に余裕がなくなっていた。

ジロウは射精を、シャッテはアナルアクメを意識して声を出す余裕もなく絶頂に向けた身体を緊張させていく。

「はぁっぁ……！」

足をガクガクさせて快感に耐えるシャッテの姿は男の支配欲を増大させていく。

親子のような関係を今日まで築いてきたけれど、そこにあったのはオスとメスのそれだった。アナルから溢れる排泄物さえもローションのように使い、激しく腰を振る。

まだまだ夢中で腰を振っているにすぎないけれど、入れる時はややゆっくりに、出すときは

早めというアナルセックスの基本の動きをジロウは繰り返していく。

その快感を受けて――。

「ふかつ♡ あ♡ おほっおお♡ うほっおおおお♡ アナルっ♡ めくれあがっ♡
ほっほおっおうほおおおおおっ♡」

――美少女が出しているとは思えないような喘ぎ声を上げていた。

その声はシャッテがアサヒにも聞かせたことのないような恥知らずなもので、恋人ではないからこそジロウに聞かせることが出来るものだった。

身体を汗で濡らし、床に排泄物の混じった汁を垂らしながらのアナルセックスという、品も何もないことをしていくが2人はどこまでも興奮していた。

そして、ジロウは射精の予感に腰を震わせてそのままアナルに中出し、シャッテの言葉通りに妊娠をさせようとしていた。

もちろん、アナルでの妊娠などありえないので無駄撃ちになるのだが、今の彼にも彼女にもそんな道理は通用しない。

本気で妊娠させようとしていて、シャッテもまたアナルでジロウの子を孕みたいと願っていた。

そんな興奮の中で絶頂しようとしたとき――。

「あ……あの、誰かいるんですかあ～？」

「「……………っ！」」

――格納庫内に2人以外の声が響いた。

それはどこかオドオドした頼りない、若い女性の声だった。

彼女は見回りの職員であり、定期的に見回りをしていた。

普段ならば格納庫にはロックをかけるので、そのロックがかかっているかどうかを確認するだけなのだが、今夜はジロウが作業しており、そのままシャッテと始めてしまったのでロックをかけていなかった。

格納庫内は電気がついているが、本来誰もいないはずの深夜ということもあるので、生来臆病な職員は泣きそうな声を上げつつも責任感から格納庫内に足を踏み入れた。

その声を聞いた瞬間にジロウとシャッテに緊張が走り、どうにか隠れようとした。

彼女がここまで来る前にジロウは咄嗟にシャッテの身体を抱え上げて、アナル固め――アナルにチンポを挿入したまま、子供にオシッコでもさせるように抱え上げて片手で彼女の口を

塞ぎものの陰に隠れた。

「……ふぐうううっ……♥」

「静かに……！」

アナルを広げられたまま持ち上げられて、身体を密着している状況。

シャッテはイキそうだったこともあり絶頂ギリギリの身体を震わせて、チンポを締め付ける。

その締め付けに応えるようにチンポがビクビク震えると、その刺激に反応してまたアナルをヒクつかせていた。

2人がそんな状況の中で、女性職員はその微かな音や気配、場合によっては臭いに反応して割と正確に2人の元へと進んでいた。

格納庫は広く、また機体や大型の機械も多く見通しは悪い。

しかし、ジロウとシャッテは休憩スペースのソファ近くのロッカーの陰に身を潜めているだけに過ぎない。

もっと動いて逃げることも出来るかも知れないが、アナル挿入したままではロクに動けずにいて、そうこうしている内に職員は近くまで来ていた。

さっさと引き抜いてしまえば良いのだけれども、ジロウはそんなことには気が付かない。

「誰か……いるんですかぁ？ あ、あの～？ 誰もいませんか～？ いないですよね～？」

不安そうな声を響かせながら歩いてくる職員が、ほんの直ぐ近くまで来ていた。

あと少しで2人を見つける、そんな位置まで来たとき、ジロウは緊張感と、見つかる不安もあり、シャッテを支える手を緩ませてしまった。

アナル固めで抱きかかえているシャッテ、その彼女が重力に引かれてずり落ちるが、彼女のアナルにはしっかりとチンポが挿入されており、それが――。

”ずっぷううう♥　ぷびっい♥”

――深く、深く、体重もかかって挿入された。

その際に空気が漏れ出る様な情けない音が響き、職員は「誰っ！？」と咄嗟にジロウたちの潜む物陰に視線を向けた。

薄暗い物陰に『誰か』というか、職員からすると2人分の人間が重なり合った『何か』を発見。

その異様な陰に怯える前に目を見開き、しっかりと何なのかを確認しようと一歩踏み出した瞬間――。

「……っ♥ も、無理いつ♥ お……っうほおおおおおっ♥♥ ほっほおお♥ おほ
おおおおおお° ♥♥」

「っ！？ ひいいいっ……！！！！」

――アナルに根元までチンポを一気に押し込まれたシャッテは喘ぎ声というには品のない雄たけびを上げてしまっていた。

その声を聞いた瞬間、彼女もまた緊張と不安の中にいた訳で、いきなりの声に驚き、怯えて、その場を一気に立ち去っていった。

「バケモノ?!」なんて悲鳴を残して格納庫から彼女が去っていくのを見て、ジロウはホッと一息をついた。

「シャッテちゃん……大丈夫……？」

「うほおおっあ……おっ♥ 一瞬、目はあったかも、けどっ、バレてはいない、かも？ ……
アナル、広がっちゃった、けど♥」

アナル固めでシャッテを持ち上げたままのジロウはヒクヒク疼くアナルからの快感にチンポを震わせていた。

シャッテは見回りの女性職員と目が合ったと言っていた。

それに2人は一瞬無言になり、さっきの女性職員が逃げていったとなれば、応援を呼んで人がくる可能性があることを理解していた。

このままここで2人がアナルセックスを続けていれば、来た人たちに今度こそ見つかってしまうだろう。

そうなれば、お互いにパートナーがいる関係である以上、誹りは免れないし、ジロウもパイロットに手を出したとなれば、シャッテと同じ勤務地では仕事出来なくなる可能性もあった。

だから、ここは素直に格納庫から出るのが正解であり、続けたいならどこか、人の来ない倉庫などで続けられれば良いのだけど――。

「シャッテ、ちゃんっ……！」

「はあ♡ あ♡ うほっお♡ ジローっ♡」

——2人は自然とお互いを求めるように身体を動かしていく。

シャッテの身体を抱えながら腰を振るジロウ、それに合わせてシャッテも爆乳を”むっちたっぶ♡”揺らしながらアナルを締め付けていく。

興奮しきった2人はもう『誰か来たら見せつけてやる』という考えにまで至っていた。

ジロウも久しぶりセックスであり、しかも美少女のアナルを自分のモノにした記念すべき行為。興奮が止められる訳もない。

シャッテとしても、アサヒという恋人はいるものの、セックスの相性がそこまで良くなくて不満は覚えていた。

元からビッチ気質でセックス好きな彼女としては物足りない行為の日々の中で久しぶりに思う存分声をあげて感じられるジロウとの行為に興奮していた。

そんな2人は止まるはずもなくどんどん激しさを増していく。

「シャッテちゃんがっ♡ アナル犯されておまんこ濡らしているところっ……見せてあげなきゃ、ねっ♡」

「おほおおおっ♡ おゝ♡ うほおおおっ♡ ほっお♡ はああ♡ おほおお♡ ひいい……♡ み、見せつけなきゃ、よねっ♡ うほおお♡ あたしのアナルはジローのもの、なんだって♡」

ジロウはシャッテを抱えたまま腰を振っていき、彼女の体重をも利用して奥までしっかりとチンポを押し込んでいく。

深く、強い一撃をアナルに受けるたびに、シャッテは「うほおおっあゝ♡ おほおお♡ うほおゝ♡」と声をあげていき、おまんこから汁を垂らしては抱えられた足をピクピク痙攣させて歌。

だらしのない声をあげながら——。

「おおおおお♡ ほっお♡ うほおおおっ♡ 射精っ♡ ザーメン、ほっお♡ おゝ♡ 孕ませ、てっ♡ ケツマンコ孕み、させへええ♡ っ♡」

——下品なおねだりをしていく。

それを受けて、ジロウもまた孕むことなんかないと知っているアナルを孕ませようと腰を振る。

”ぬっぷずぽっずっぶ♥”と音を激しくさせて、排泄物をチンポにまとわせて、それを飛び散らせ李。

もし、誰かくれば隠しようもない状態で、爆乳を”たゆんっ♥”と揺らしながら喘いでいく。

2人の絶頂は一旦中断されたのが再び近く燃え上がってく。

ジロウの腰振りも激しくなり、アナルをほじくり返す勢いを見せる。

2人の汗、体液、シャッテの排泄物を飛び散らせ、床を飾っていき、そして——。

「射精っ！ だす、よっ、出すからねっ！ アナルっ、ここは、私のモノ、でっ♥ 孕ませる、からっ……！」

「らひてええっ♥ ほおおおお♥ おほっ♥ ふっかいっ♥ うほおおっあ♥ おおお♥ 孕ませって♥ ケツマンコ孕みっ♥ ウンチと一緒に赤ちゃん産んであげるっ♥ おゝ♥ うほっおおおおおお♥♥♥」

——ジロウは思い切り射精していく。

アナルを更に広げるようにチンポを膨張させて、そのまま勢いよくザーメンをシャッテの中へと吐き出していった。

繰り返すが、アナルで孕むことなどないのだけれども、2人はそんなこと関係ないとばかりにヒートアップしていた。

射精しても尚、ジロウは腰を揺らし、粘りつく様な快感を求めていく。

そんな行為をしばらく繰り返して、ようやくジロウはシャッテを床に下ろした。

下半身裸の彼はフラフラとベンチに座り、勃起したまま、茶色い排泄物と白い精液が付着したチンポをそそりたたせていた。

床に下ろされたシャッテはアナルから”ぷびい♥”と情けない音をさせながら荒い息をしていて「腰、抜けた……♥」と身体を震わせていた。

しかし、ずっとへたり込んでもおらず、息を整えるとシャッテがまず目を付けたのは——。

「はあ……はあ……♥ あ……ジロー……ごめんなさい、あたしのウンチ塗れになっちゃってるわ……」

「はあはあ……いや、気にしないで、あ……シャッテちゃん……」

——ジロウのチンポだった。

未洗浄のシャッテのアナルを念入りにほじくり返した結果、排泄物がこびりついてしまって

いた。

彼女はそれに申し訳なさをかんじながら、まだ力の入らない足に力を入れて、フラフラと一度立ち上がり、ジロウの目の前でヤンキー座りでしゃがみ込んだ。

汚物が付着して、臭いのキツイそれを前にしてもシャッテは臆することもなく――。

「綺麗にするわね……れろお♡ ん……にがい♡ んちゅ♡」

「あ……ああ……シャッテ、ちゃんっ……」

――チンポを舐めていく。

なんの準備もなく挿入されたジロウのチンポには全体にねっとりと茶色い排泄物が纏わりついていた。

竿全体には薄く延ばされたように付着しているけれど、アナルの内部をひっかく形になるカリ首にはかなり多めに、場合によっては塊のようなものまで付着していた。

そんなチンポ全体についた排泄物を丁寧に丁寧に、舌を動かして舐める。

「ん……れろお……♡ れるれろお……♡ んっ♡」

自分のものとは言え排泄物を躊躇うことなくシャッテは舐めていくが、それは彼女に特殊な趣味があるとかではなく、感謝と奉仕の気持ちからだった。

汚れの付着した竿をじっくり舐めていき、狙うのは当然カリ首、チンポのカサには排泄物がたっぷりつついている。

「れろお……ちろちろお……♡ ん♡ れろお♡ れるるう♡」

その汚れも気にせずに、むしろ積極的にシャッテは舐めていく。

どこか脂を感じさせる滑りのような排泄物を舐めとっていき、そのままチンポを咥え込んでいく。

「じゅるる……れろお……じゅちゅるるっ♡」

「う……あ……！」

シャッテはチンポを深く咥え込んでいくけれど、それはあくまでも掃除をする為のフェラチ

オ。

しかし、咥え込んだまま口の中で舌を「れろれろ♥」と動かしての刺激はジロウのチンポに心地良い快感を与えていく。

「れろお……♥　じゅるる♥　じゅちゅるるる♥　ちゅじゅるっ♥」

口全体でチンポを捉えて、包み込んで、片手はジロウのキンタマを優しく揉んでいく。
時折、キンタマに付着した排泄物の汁も――。

「あむ♥　れろれろお……♥」

――毛繕いでもするように舐めとっていた。

そのままキンタマも綺麗にして、そして改めてチンポを咥え込むと念入りに掃除を繰り返す。
表面に付着した汁も、尿道の中へと入り込んでいないかを確認するように強く吸引していく。

「じゅぷっ♥　じゅるるるうっ♥　じゅちゅるるる♥　じゅるるるるう♥」

頬を凹ませながらチンポを強くバキュームして、上目遣いでジロウを見つめていく。

そして、改めてシャッテは全体を確認するように舐めていく。

一番汚れの溜まっていたカリ首に、舐め残しがない様に丁寧に舐めていき、ジロウのチンポが綺麗になったころ――。

「れるう……♥　ん、ちゅう♥　れるれろお……♥　んあ……！」

”ぶびいっ！”

――シャッテのアナルから音が響いた。

太いジロウのチンポで犯されてかき回されて広げられた結果、やや開き気味になっていたそこから空気が漏れた。

それだけではなく、先ほど男が射精した精液と、シャッテの排泄物などが混ざり合った半ば液体のような『緩い』ものが漏れ出てしまっていた。

いくら美少女であったとしても生物である以上は仕方のない排泄行為。

漏れ出たそれは、液状になっているけれど、腹を下した時のような軟便でもあった。

ジロウがアナルをかき回したとこで、内部に溜まっていた排泄物が解された結果だった。

ちょうど、お掃除フェラをする為にヤンキー座りをしていたシャッテは、まるで和式トイレで用を足したかのようなようだった。

それに顔を真っ赤にしながら、シャッテは流石に目の前で漏らしてしまったことに対する羞恥心に震えて何かを言おうとした瞬間、更に――。

「あ……！　じ、ジロー、これはっ……あ！」

「え……シャッテちゃ、え？」

”ぶびびいっ！”

――結構な音を響かせて、さっき出したものよりも量も多くて立派なもの漏らしてしまっていた。

さっきのような液状のものではなく、固体のものが床に形をそのままにひりだされていく。

シャッテのアナルは、ジロウの激しいピストンにより一時的に緩くなってしまうようだった。

何よりも、ジロウの太いチンポを挿入されたことで穴が広がり、美少女が出したものとは思えないほどに太いものを出してしまっていた。

「あ、あわ……！　えっと、あっ……………」

人前で、男の前で排泄行為をしてしまったことにシャッテは慌てていく。

慌てながらどうには排泄を止めようとしたようだったが――。

「ちょっと、あ！　止まって、なんっっ！　あああ！！」

”ぶりゅっ！　ぶびっい！”

――変に身体に力を入れたからか更に排泄物が押し出されていった。

しかも、アナルをキュッと閉めたことによって、ぶつ切りにされた固体の排泄物が床にボタボタと落ちていく。

先に出した液状の排泄物の水たまりに飛び込むように、少し精液混じりのそれが堕ちていく。

「止まって……みないでえ……」

もうシャッテも止めることは諦めたのか、出るに任せているようで、そのまま太い、一見するとリレーのバトンのような太さの排泄物を出していく。

床には最初のもものと合わせての大量のモノが積まれるように排出された。

お腹の中に溜まっていたものを普段以上にスッキリと出したことに対しての快感でか、シャッテは――。

「あ……ふうう……う❤️」

――恥ずかしさもありつつだけれど、少し気持ち良さもあるようで目を細めていた。
直ぐにそれが恥ずかしくなったようで、また顔を真っ赤にして両手で頬を抑えていた。

「うわ……………こんな出た？」

シャッテはチラリと自分が出したものをみて、恥ずかしそうに耳まで真っ赤にしていた。
それも仕方ない行為であり、かつその量も量だった。

シャッテは小さく「昨日……その、ウンチしないで寝ちゃったから……普段は、こんな」などと呟いていたその排泄物の量は、大きめのバナナが2～3本落ちているかのような量だった。
もちろん、美少女が出したものだからと言って、臭いがしない訳もなく、格納庫の鉄と油の匂いに混じって酷い便臭が漂っていた。

「っ……！」

流石にジロウも臭いに一瞬たじろいてしまい、それにシャッテは更に羞恥心を強めて身体をこわばらせるが、その際に更に溜まっていたガスを漏らす様に放屁してしまっていた。

とことんアナルが緩くなってしまうことに絶望的な気分になっているシャッテ。

顔を真っ赤にしつつ、『こんな醜態を晒しては嫌われる』という不安もあり、顔を赤くしつつも冷や汗をかきながら、どうにか出してしまったものを隠そうとするが、ジロウには全て見えてしまっていた。

「これ、ち、ちが、そのっ、掃除、掃除すぐに、するね？ って、あ……………え？」

どうにか取り繕おうとしても、快感からの脳の復帰はまだでありあたふたしているシャッテだったが、彼女の手を引いてジロウは抱き寄せた。

その行為に驚きつつも、どこか『男らしさ』にキュンとしてしまったシャッテ。

何をされるかとか考える間もなく、ジロウは彼女の口、さっきまでチンポを舐めて掃除していた——つまりは排泄物を舐めとった口にキスをした。

「ちゅっ……ん……」

「ちゅっ……♥ んんっ♥ ちゅう……ジロー……♥ 汚い、わ……ちゅっ♥」

いきなりのキスに戸惑いつつ、シャッテは彼の意図を読み取っていた。

慌てる自分をフォロー、かつ『私は何も気にしない』ということ言葉をではなく行動で示して見せていたのだ。

シャッテはその行為に胸をときめかせていて、目を細めながら、身体を摺り寄せていく。

体勢を変えたことでまたアナルから”ぷびっ！”と音をさせて少量のナニが漏れ出ていくけれど、2人は何も気にしない。

「ジロー……♥ んんっ♥ れろお♥ れるうう♥ ちゅう♥ じゅるる♥ はあ♥
はああ♥ れろお♥」

自分を受け入れてくれる。汚い自分を受け入れてくれるという状況にシャッテはどこまでも興奮してときめいていく。

それはまだ親子的な親愛ではあるものの、アサヒに対して『汚いところを見せたくない』という気持ちで愛するがあまり、自分を見せられずにいたシャッテからすると恋人以上に親密とも思える距離感になっていた。

舌と舌とを絡め合わせていき、ジロウは彼女の手を取りチンポを握らせた。

熱く固く勃起したチンポは、シャッテの行為に引くことなく興奮していることを示していた。

「れろお……♥ ジロー♥ んんっ♥ らいひゅき……♥ じゅれろお♥ れるる♥」

自分をどこまでも受け入れてくるジロウに対しての強い愛を表明しながらシャッテはキスをしていく。

口の中に残る排泄物の味を教えるように舌を絡めさせていき、唾液を交換したら、一度唇を離した。

「はあ……はあ……♥ もー、だめ♥ 完全にスイッチ入っちゃってる……♥ ジロー

……♡ ん……♡」

フラフラとまだ力が入りきってない様子だけれども、ジロウから身体を離して一歩二歩下がると背中を向けた。

足元にある排泄物を少し踏んでしまっているが、今のシャッテはそれも気にしていないようだった。

そのまま馬飛びのように上半身を倒した彼女は両手で自分のその大きなお尻を左右に広げた。

「ね……♡ ジロー♡ まだ出来るんでしょ？ ♡ あたし……まだ、まだまだジローのオチンポ欲しいの♡ それとも、ウンチ出した穴は嫌？」

「シャッテちゃん……♡」

広げられた尻の谷間で、アナルは物欲しそうにパクパクしていた。

開いたときにはシャッテの排泄物とジロウの精液が見えていて奥からそれが垂れていく。

わざとその光景を見せつけて、汚い自分を曝け出すシャッテ。

それは父親に甘える娘のようで、それを受け止めたジロウはチンポをビクつかせながら鼻息荒く彼女に迫っていく。

再び括れた腰を両手でロックすると、そのヒクヒクと2人の体液混ざったアナルにチンポを押し当てる。

「シャッテちゃんのアナルっ……♡ しっかり私のものだって、アピールしとかなきゃ、ね、えっ♡」

”ずぶうう♡”

「ひああああ♡ おおお♡ おほ♡ おゝ ああ♡ うほおおおおおっ♡ お♡」

少し慣れたこともあり、射精して余裕を持ったジロウはじっくりとアナルに挿入していく。

太いチンポで広がったシャッテのアナル、自分のモノだと教え込んでアピールするようにゆっくり奥まで挿入。

「ふううう……♡」

奥まで挿入してそこで男は一息つく。

大きく声を漏らして息を吐き、キュンキュンと締め付けてくるアナル、まだ内部に残る排泄物と自分の精液がまとわりつく快感を楽しんでいた。

「はああ♥ あ♥ ジローのオチンポっ……♥ やっぱり、いいっ♥」

シャッテもまた自分を奥まで犯すチンポを気に入り、熱い息を漏らしていた。

声を震わせながら、馬飛びのような体勢なので足を震わせながらも満足そうにしていた。

おまんこからマン汁を垂らすけれど、既にアサヒの精液は出切ってしまったようだった。

代わりに、アナルからはジローのザーメンが零れていく。

それを潤滑油にしながらジローが腰を振っていく。

「っお！ あ……シャッテちゃんのアナルには、もっともっとザーメン出してあげなきゃ、ねっ……♥」

最初は味わうようにゆっくりだったけれど、動き出せば止まらない。

激しく、ムチムチとしたシャッテの身体を大きく揺らさせていく。

「んんっ♥ おほおおおお♥ っ♥ ひっ♥ いくら、でもお♥ おおおお♥ あおっ♥ ほおお♥ うほおおおお♥」

パンパンとジローの腰が打ち付けられる度に、その衝撃が彼女の身体を揺らしていく。

デカケツも波打っていき、その爆乳も大きく揺れる。

男を興奮させて発情させるための様にしか見えないその身体。

そのアナルをジローは深く激しく犯していた

「はあはあ……！ はあ……！」

太いチンポを奥まで挿入したら、ギリギリまで引き抜いて、助走をつけるようにして――。

”ずぶう♥”

「っ♥ うほおおおお♥ おっ♥ おほおお♥ ほっお♥ お♥ うほっお♥♥ ケツマンコ、いくうう♥ うほおおおお♥ っお♥」

——挿入されたチンポによってシャッテはだらしなく喘いでいく。

ピストンされる度に、ジロウのチンポにはまだアナルの中に残っていた排泄物が粘つくように語んでいる。

そんな汚い状況であっても2人は興奮を鎮めることなくいる。

今にも誰かが来て、この最低な宴を見られてしまうかも知れない状況でも、シャッテもジロウも激しくアナルセックスを楽しんでいた。

「ひiiiiiiii♥ ジローのチンポっ♥ おoooooooo♥ うほooooooooっ♥ おっ♥ おっ♥ うほoooooooo♥」

空気が漏れる下品な音を響かせて、交尾を繰り返す。

汗だくの2人はどれだけ汚れても行為を止めずに、誰かが来るかも知れないことも忘れて、気づけば互いに全裸でアナルハメをする。

「シャッテ、ちゃんっ♥ っ！ おっ♥」

腰をしっかりと掴んだジロウはチンポを奥まで入れると、小刻みなピストンをしていく。

”ぬっぽぬっぽ♥”と音をさせて、緩急をつけてアナルを犯す。

太いチンポで念入りに奥を刺激される快感にまた彼女は声を漏らしていた。

「っお♥ おほoooooooo♥ うほoooooooooooooooo♥ ほっお♥ うほoooooooooooooooo♥♥♥ おっ♥ おおお♥ あ♥」

汗の浮いた爆乳を揺らして悲鳴とも言える雄たけびを上げる。

喘ぎ声なんてお上品じゃない、交尾のケダモノ声を出してシャッテはジロウのチンポを受け止めていく。

「ぐっお、さっきよりも！ きつつ……！」

「ほoooooooooooooooo♥♥♥ うほoooooooooooooooo♥ おおっお♥ おっほoooooooooooooooo♥」

太いチンポでアナルを穿られる度に、接合部からまだまだ内部に溜まっている茶色い排泄物を漏らしつつシャッテは吠えていく。

「うほおお❤️❤️ ほおおおおお° ❤️ おおおお° おお° ❤️ うほおおおおお❤️❤️」

アナルの奥を念入りに刺激されたと思えば、また激しく、大きなストロークでをほじられ、その度に格納庫に響き渡る声を出していた。

ジロウが動きを変えるたびに、その大きな声を出していき、快感が高まっていくと——。

「おほおおおおお❤️ おおおお❤️ ほほおおお❤️ ひっうほおおお❤️ うほおおお❤️❤️❤️」

——爆乳を揺らして激しく絶頂していく。

その言葉、本気のそれを受け取ったジロウは、たるんだ腹を揺らして、今までよりもさらに強くと自分に言い聞かせるようにしてピストンをしていった。

そして、妊娠できない無駄撃ちではあるけれど、2人は本気で妊娠しようと——させようとしながらの精液を吐き出していった。

その後、またアナルからチンポを引き抜くとだらしない音と共にお漏らしをするも、シャッテもジロウもそんなことには気にしないで交尾を続けていた。

——。

—————。

「れろお……❤️ ん❤️ こんなところにも……❤️ あたしのっ❤️ れるる❤️ おじさまのオチンポ、ピカピカに、ね❤️」

「はああ……はあああ……………最高っ……」

その後、結局誰も見に来なかった結果、2人は何度も何度もアナルセックスを繰り返していった。

今はまたソファに座るジロウのチンポをシャッテが舐めてお掃除をしていた。

排泄物の汚れを丁寧に舐めとる献身的なフェラをするシャッテの頭をなでながらジロウは——。

「ふうう……そう言えば、シャッテちゃん……エッチの時、私を『ジロー』って呼んでたけど」

「れろお……え！？　そ、そうだった……？」

——さっきまで自分を『ジロー』と名前と呼んでいたことを思い出して尋ねた。

シャッテは何か意識したわけでもなかったようで驚いてしまうが、それでもチンポを舐めていく。

そして、直ぐに思い出したのか、確かに興奮して『おじさま』ではなく『ジロー』と呼んだことを思い出したようだった。

「ごめんなさい、おじさま……オチンポ汚しただけじゃなくて、呼び捨てになんて……れろお……❤️」

さっきまでも行為を思い出して頬を赤らめつつ反省するシャッテだったが、ジロウとしては怒る気も何もなかった。

ただ、自分のこともアサヒと同じく呼び捨てで呼んでくれたことが嬉しかったのだ。

「いいんだよ、これからもそう呼んでくれたら嬉しいねえ……」

「ちゅっ❤️　ん……いきなり、呼び方変えたら……勘繰られないかしら？　れるれろお❤️」

「大丈夫だよ、きっと……きっとね❤️」

少し心配をするシャッテとは違い、楽観的に微笑むジロウ。

それを受けてシャッテは「もう！」と頬を膨らませるが怒っている訳ではないようだった。嬉しそうに微笑んで——。

「これからは2人きりの時はジローって呼ぶわね❤️」

——『これから』もこの関係が続けることを確定的としてそう告げた。

その言葉にジロウは喜び、またチンポを固くしていくのだった。

——。

—————。

「ふあああ……流石に少し寝不足だねえ……おっとお……」

次の日の朝。

大きな欠伸をしながらジロウは格納庫へと向かっていた。

昨夜はあの後、シャッテを先に帰らせてジロウは掃除をしてから部屋に戻ったのだった。

流石にシャッテの排泄物などをそのままにしておくわけにはいかずに、完璧ではないまでも綺麗に掃除をしていた。

その後、シャワーを浴びたりなんだりで時間を取られた結果が寝不足だ。

それでも満足そうに微笑むジロウが格納庫に入ると、既にシャッテは来ていて他の整備士たちと会話していた。

元気そうなシャッテの姿を「若いって良いねえ」と、しみじみ見つめたジロウはみんなに声をかけていく。

遅れはしたものの、深夜まで作業をしていたジロウを責めるものはおらず、「お疲れ様です」や「眠そうですけど、大丈夫ですか？」と気遣う言葉をかけられていた。

シャッテも笑顔でジロウを迎えて――。

「おっはよ、ジロっ――おっ、おじさま！」

「お、おはよう、シャッテちゃん……」

――ついつい、ジロウを名前で呼びそうになり、かなり強引に呼び名を戻していった。

周りは気にせず、気づかなかったようだけれどもシャッテは恥ずかしさもあるようで顔を真っ赤にしていた。

と、そこに昨夜見回りに来ていた女性職員がやってきた。

「おはようございます……えっと、昨日、格納庫でその変なものを見たんです！」

「……………！」

どこか怯えた様子の女性職員は「格納庫で観たナニカ」を身振り手振りで説明していく。

それを聞きながらシャッテとジロウはチラリとアイコンタクトをして、お互いに緊張しつつも話の輪に加わっていく。

見た時間や、下手くそなイラストなどを交えて必死に説明をしていく職員。

整備士たちも「侵入者？」「何かの実験動物でも紛れ込んだか？」と真剣に話を聞いていく。

しかし、話が進むうちに、女性職員はその手の経験がないのか思いつかなかったが整備士たちは「セックスしている奴らがいたんじゃないか？」という結論に向かっていった。

それを聞いて女性職員は顔を真っ赤にするが、それを元に記憶を再構築していくと、「凄くグラマーな女性を男性が抱えている姿だったのかも」という結論に至った。

そして、それを聞いたその場の全員、シャッテ以外の視線は彼女に——シャッテに突き刺さっていく。

「あ、あたし！？　あたしの訳ないでしょ！　こ、ここにはアサヒいないんだし、いたってこんなところじゃしないわよ！？」

シャッテは慌てて手を振って否定する。

それに整備士や女性職員も頷くほどに、シャッテのアサヒへの一途な愛は知れ渡っていた。

「私もシャッテさんではない、と思います。目が一瞬だけあって……今思い出すと凄く、その、酷い顔で、シャッテさんみたいな美人とは似ても似つかない顔だった気がするので……」

女性職員もシャッテではないと言うが、その理由が理由なので、言われた本人は少しだけ複雑そうにしていた。

疑いが晴れても、内心ではシャッテもジロウもバクバクと心臓を鳴らして嫌な汗をかいてしまっていた。

その後も「じゃあ、誰が？」「この基地で巨乳って言うത്？」「その前にロックかけずにやるってどんだけ我慢できなかったんだよ」などと半人捜しへと発展していた。

「……………まあ、特に何か被害があるわけでもないようだし、気にしなくて良いんじゃないかな？」

話し合いがヒートアップするさなか、シャッテはジロウにアイコンタクトを送り、彼はそれに押されるようにして話をまとめていく。

最年長であり、まとめ役のような彼の言葉にその場の全員は頷いていく。

そこに更に「今後は私が責任もってロックかけるようにしよう」と胸を叩いた。

ジロウの言葉に納得していく中で、シャッテも彼の肩に手をおくと——。

「あたしもロックの確認には立ち会おうし、それで良いでしょ？　ね♥️　”毎晩”しっかり確認すれば誰も入ってはこないわよ♥️」

——嬉しそうに楽しそうに賛同していく。

シャッテの言葉を受けてジロウはニヤけた笑みを少し浮かべるも、口元を引き締めなおしていく。

2人の言葉に反論もある訳なく、整備士たちは仕事を初めて、女性職員も「お願いいたします……」と頭を下げて去っていった。

それを見送った2人は目と目を合わせた。

「……………❤ ジロー❤ 今日からさっそく立ち会うからね？」

シャッテは妖艶に微笑んでウィンクをして見せるのだった。